

【第 42 回 世界新体操選手権大会】

【団体種目別決勝】

団体総合を終えた翌日、種目別決勝が行われた。前日の演技と結果に対して多くの方々からお祝いの言葉をいただいたが、選手たちは SNS 等も控え、気持ちを切り替えて決勝に臨んだ。

しかし、団体総合とは異なる緊張感もあり、試合前からどこか落ち着かない様子が見られた。大きな結果を残した翌日に、もう一度気持ちをゼロに戻し、同じ集中力で試合に臨むことの難しさを感じる種目別決勝となった。

《ボール》

合計 25.850 点 (DB5.0/DA7.1/A7.8/E5.95) 7 位

本番では、最後の交換で 2 名が落下したほか、それ以外の箇所でも受けの追加価値を取りきれない場面が続き、全体として本来の力を十分に発揮することができなかった。

前日の団体総合では今シーズンで最もまとまりのある演技を披露することができただけに、その状態を翌日の決勝まで継続できなかったことは大きな課題となった。

良い演技を一度成功させることだけでなく、それをどのような状況でも繰り返し発揮できることが本当の実力である。今回のボールは、選手たち自身が現在の力を改めて認識し、気持ちを引き締める演技となった。

出場選手：田口久乃、西本愛実、花村夏実、田中友菜、眞鍋凜

《フープ・クラブ》

合計 28.300 点 (DB6.0/DA7.1/A8.0/E7.2) 4 位

ボールでの試合運びに大きな反省が残ったことを受け、フープ・クラブに向けては、選手同士で改めて自分たちの状態について話し合った。一人ひとりが現状を受け止め、気持ちを立て直したことで、主体的に試合へ向かうことができた。

本番では、リスクの受け直後、クラブを取りきるまでに時間を要した場面や、CR の受けでその場での落下が 1 か所生じたものの、今シーズンを通して課題としてきた演技後半では集中力を切らすことなく、最後まで迫力ある演技を見せることができた。

ボールからは試合運び、演技内容ともに改善が見られたものの、結果は種目別 4 位となり、メダルまであと一步届かなかった。世界の上位国も大会を重ねるごとに構成、実施ともに精度を高めている。

今後、世界のメダル争いの中で安定して勝ち切るためには、現在の演技を確実に実施するだけでなく、さらに価値の高い構成へ挑戦し、それを本番でも安定して発揮できる技術力と精神力が必要である。

出場選手：田口久乃、西本愛実、花村夏実、田中友菜、田邊観世埜

【種目別決勝 総括】

団体総合で、自分たちが持つ力を最大限に発揮し、2種目を揃えて銀メダルとオリンピック出場権を獲得できたことも、現在の日本の実力である。一方で、種目別決勝では両種目ともにミスが生じ、メダルを逃したこともまた、現在の実力として受け止めなければならない。

今シーズンのワールドカップシリーズを通して、すべての強豪国がノーミスで演技をやり切った場合、現状の日本が構成価値だけでそれらの国を上回り、圧倒的な得点で勝つことは難しいという現状を確認してきた。

だからこそ今大会に向けては、単純に難度を上げることだけを求めるのではなく、選手たちが自信を持って最大限の力を発揮できることを最優先とし、「攻める部分」と「確実に取りきる部分」のバランスを考えながら作品の内容を整えてきた。その結果、団体総合では2種目をやり切り、銀メダルと2028年ロサンゼルスオリンピックの出場権を獲得することができた。

一方、種目別決勝では、強豪国が高い構成価値を持つ演技を大きなミスなく実施した際、日本を上回る得点を獲得していることも改めて確認する結果となった。この現実から目を背けることなく、今回なぜ団体総合で結果を残すことができたのか、そしてなぜ種目別決勝ではメダルに届かなかったのか、その両面を冷静に分析していく必要がある。

また、来年以降、今回オリンピック出場権を獲得できなかった国々は、出場権獲得に向けて強化をさらに加速させてくることが予想される。その強化のスピードに、日本が乗り遅れることは絶対に許されない。

今回オリンピック出場権を獲得したことで気を緩めることなく、次に目指すべきはロサンゼルスオリンピックでのメダル獲得である。そのためには、他国のミスによって順位が上がることを期待するのではなく、どの国がノーミスで演技をしたとしても、日本が自らの力で上回ることでできる技術力、構成力、表現力、そして精神力を身につけていく必要がある。今回の結果を一つの成功として捉えるだけでなく、なぜ団体総合で結果を残すことができたのか、日本の強みはどこにあり、今後何をさらに高めなければならないのかを明確にすることが重要である。同時に、各国の演技構成や技術的特徴、得点傾向についても詳細に分析し、世界の強化スピードを上回る取り組みにつなげていかなければならない。

今大会で得た成果と課題を今後の強化へ確実につなげ、コーチ、審判、医科学をはじめとする様々な分野と連携しながら、2028 年ロサンゼルスオリンピックでのメダル獲得に向け、日本新体操全体でさらなる強化に取り組んでいきたい。